

総合的音楽教育の必要性

久保田園実

Kubota Sonomi

I. はじめに

他の芸術と異なり音楽は作曲家が残した記号である楽譜を再創造しなければならない。

その音楽を生かすも殺すも演奏家次第ということになる。しかし、音楽教育に於いてその中心は演奏技術に偏りがちであり、テクニックはややもするとアクロバティックなパフォーマンス（指が速く動くこと、その要素を含んだ楽曲を如何に正確に速く弾くかなど・・・）が重視され、メカニックと同義に思われがちである。

楽器を操る技術力に価値がない訳ではないが、その技術が何の為に必要で、音楽によって伝えられるものが如何に人々の心に感興を与え、どのような価値をもつものが音楽という芸術の価値を決定するものではないだろうか？

技術としてではなく、芸術としての音楽教育に欠かせない総合的な音楽教育が如何に大切であるかを具体的に考えてみたい。

II. ソルフエージュ教育

日本ではピアノ教師は多いが、ソルフエージュ教師が少ないと言われる。音楽家にとって基礎教育であるソルフエージュは初頭教育から大学までの一貫とした音楽教育として習得されているとは言い難いのが現実である。ここではソルフエージュを狭義のフランス語の意味だけでなく、広義の完全な読解力と表現力の習得を目的としたものとして、考えていきたい。読譜（リズム&音読み）・聴音・初見・楽典・和声法・対位法・楽式論・リトミック etc. から、いくつか具体的例をあげてみる。

【リズム】

自宅のレッスンでは、幼児にピアノを教える場合でも、ピアノに触る前に、まず身体的動作と連動させたリズム打ちをする。次に簡単なリズム譜を使用して、リズム打ちやリズム歌いを行う。リズムを声に出して歌うことは、聴音の際にも大変必要かつ有意義なことである。視覚的に視た音の並び方と聴覚的に聞こえるリズムが一体化することが必要なのである。

【音読み】

間、線の音の区別がつくようになったら、自作の音読み教材を使用して読む力をつける。音を一つずつ読むのではなく、絵を見るように、図形的にまとめて見る癖をつけるようにする。これはいずれ、初見視奏（視唱）の際にも大変有効になる。

ドレミで読んでいたものを、ドイツ音名で読み、更にシャープやフラットをつけた読み方で読むようにする。譜表も高音部譜表、低音部譜表、と増やしていく。

【聴音】

幼児や大きくても経験のない生徒や学生に指導する場合、聴こえる音をいきなり五線紙に起していくのは無理がある。まず、ピアノで弾いた音を同じ高さで歌わせる。ピアノで弾いたリズムをリズム歌いさせる。数小節の短い旋律を弾いて、覚えて歌わせる・・・etc.いろいろなパターンで試してから、実際に楽譜に書いていく聴音を行うようにする。

和音聴音も、3和音なら6通りの歌い方（ドミソ・ドソミ・ミドソ・ミソド・・・）を練習したあと、聴き分ける訓練をする。また、何の和音かを答えさせる前に、一つの和音の転回形を弾き、種類の異なった和音が混ざったら答えさせたり、属七の和音を弾いたら次に解決する和音を予測させるなどして、絶対音的に聴かせるだけではなく、ハーモニーの持つ色合いや調性関係を感じさせながら聴きとる力もつけさせるようにしている。これは楽曲分析の際にも役に立つ。

【楽典】

幼児のうちから理解できる範囲で、演奏する作品を読み取るのに必要なことは弾くこ

とと並行して教えていく。

楽譜を読む行為は謎解きのようなもので、作曲者の意図をどれだけ読み取ることができるかが大切である。学生達は〈覚えなくてはならない知識として〉敬遠しがちだが、例えば倍音の意味を言葉だけで覚えるのでは無く、実際にピアノで倍音を鳴らして実験し、そうして得た知識を演奏にどう結びつけるか・音色やバランスなどをも変えられることを実感させながら教える事も必要である。

幼児などは鍵盤の下の方を押さえておき、上の方で音を鳴らすと、ペダルを使わないのに音が響き残っていることに、目を丸くして興味を持つ。その時に、ダンパーやペダルとの関係をピアノの中を見せ、構造を教えながら一緒に説明してあげることが大切である。教えるほうも教わるほうも、楽典は紙面上の知識だけではないことを知るべきである。

【和声法】

和声学は楽譜を読み解く上で、最も重要とあって良いものである。作曲家を目指す学生だけが勉強するものではない。その必要性は4声体和声の熟達というより、楽曲分析→解釈→演奏の一体化にある。

Ⅲ. まとめ

音符はただの音の記号ではなく、音楽言語の記号である。音符をただ音にするだけでなく、音楽言語に則って音符を分析する思考回路が必要になってくる。いくつかの項目であげてきたような基礎知識と、更に楽式論や音楽史など、楽曲の成り立ちを多角的に眺める知識も必要になる。

短大におけるピアノのレッスンの中だけでは全てを教えることは出来ないが、演奏する作品のアナリーゼ（分析）や和声進行等を同時に教えることで、より生き生きした演奏を目指すことができる。また、楽典や和声法などで得た知識を常に演奏に結びつけていくように教師も学生も意識する必要があるだろう。

これらの教育が初等教育に於いて最も大切であることは言うまでもないことである。特

に日本人はリズムに欠けると言われる。これは日本の音楽の有り様が西洋の音楽と全く異なる土壌をもつことやダンスをあまり踊らないという民族性からも影響されると思われるが、初等教育でのリトミックなどもとても大切な指導要素になると考える。

個々の項目の指導の際に常に横の相互関係・相互作用を意識することが大切である。音を読むこともリズムを叩くことも、常に単なる記号から言葉を紡ぎ出し、一字一字語ることがとくに、命を吹き込むようにしなければ、機械的な発音や運動に終始してしまう。

良い演奏の為の出発点に分析がある。目に見えず、触れることのできない音楽という構築物を再構成するには、作品の仕組みを理解することが必要である。機械的に指が動き、エチュードが速く弾ける・・・ということに時間を注ぎ、先を急ぐより、時間と労力は必要となるが、目と耳をひらき、和声法や楽曲分析などを総合的に勉強して真の音楽の教養を身につけた人こそが良い演奏家となり、また将来音楽教師として、また幼稚園や保育園で幼児の指導に携わる場合においても、良き指導者となることであろう。